
神様が落としまして.....

夢追い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様が落としまして……

【Nコード】

N3903Z

【作者名】

夢追い人

【あらすじ】

俺の家族は少し変だった。

(よく覚えていない) 両親は海外を飛び回り、祖父はすごい豪傑、祖母はめっちゃくちゃ若い、姉は美少女……弟の俺は容姿も才能も平凡だ。

でも、そんなのは偶然こういう家に生まれたからだと思っていた。ある日、興味本位で尋ねたことからこの世界の常識を知ってしまう……が、割とどうでもいい。

世間に疎い俺は、今日も頑張って生きてます。

春の拾いモノ（前書き）

駄文ですが、読んで頂けたら幸いです。

主人公の特異さは徐々に引き出していきたいと思います。
今回だけでも十分おかしいですが……

春の拾いモノ

彼はとある街から少し離れた山の近くの屋敷に生まれた。

金持ちの豪邸というわけではなく、古くてでかいだけの忍者屋敷のような家である。実際、隠し扉や秘密の抜け道といった仕掛けもあるらしい。

物心ついた頃には彼の両親は世界を飛び回りついていたため、あまり顔を覚えていなかった。

彼が世話になつたのは祖父母と姉である。

祖父は早くから厳しい鍛錬を課し、祖母には母代りに世話になり、七つ程上の姉には友達代わりによく遊んでもらっていた。

祖父は、頭が禿げ（本人は丸めただけと言い張る）で、がっしりした体格の老いを感じさせない老人である。

現在は春の少し肌寒い時季だが、甚平姿で孫である彼を扱って笑っている。

全力を彼には見せたことがないが、山から下りてきた暴れ猪を一撃で仕留めていたのは記憶に新しい。

ふと疑問に思った彼は体を起こし、同じく居間で寛ぐ祖父に祖母は後妻なのかを尋ねるが、

「馬鹿を言うでないわ！ 僕は婆さん一筋じゃ！」
大声で怒鳴り返された。

この屋敷が住宅地にあつたなら近所迷惑になつただろう。

その時、お茶の入った湯呑が乗った盆を一旦床に置いた誰かが、障子を開けて入ってきた。

黒の長髪を簪で纏めたかわいらしい女性で着物を着ている。その容姿から判断すると、20代前半だろうか？

「あらあら、お爺さん、照れちゃいますよ〜」
祖母だった。

仄かに赤く染めた頬に手を当てて、爺さんの言葉に照れている。彼は至近距離で怒鳴られたために、キーンと耳鳴りがしており、婆さんの言葉は全く聞こえていなかった。

爺さんたちはお互いを褒め合い、昔の話まで引つ張り出して盛り上がっていく。

……しばらくすると、ジーツと観察されているのに気付いた爺さんたちはオホンと一つ間を置き、彼に居住まいを直して向き直る。

「それで、何で急にそんなことを聞いたんじや？」

「だって、婆さん若くてキレイだから・・・」

「あらあら、真司しんじったら、わたしを口説いてるのかしら〜？ おませさんなんだから〜」

「真司！ 貴様、孫の分際で儂の婆さんに手を出そうとするとは・・・！」

「爺さん、落ち着いて。俺はただの孫だから。婆さんを恋愛対象に見ていないから」

婆さんが変な解釈をしてしまったために、爺さんが再び怒り出してしまふ。というか、爺さんは幼い孫に遠慮なく怒りすぎだ。

「で、婆さんがそんなに若いのは何で？」

「あらあら、それはわたしが『神様の落し物』を拾ったからよ〜」

この世界には『神様の落し物』（今では主に『ギフト』と言われる）と呼ばれるものがある。これは普通ではありえない『力』のことだ。何時、何処で、誰が（何が）、どのような力を得るのか分からず、昔の人は神様が天から落としてしまったのではないかと考え、そう呼ばれたした。

この力は現代の科学でも解明できておらず、多くの研究者たちの頭を悩ませている。

婆さんが拾ったのは、名前を付けるなら『外見の若さを保つ力』と
いった所だ。本人が言うには、年々体の衰えは感じているとのこと。
それでも、その力は人々には十分魅力的なので、数多くの報道陣や
研究者、犯罪者が押し寄せてきたらしいが、爺さんがことごとく蹴
散らしたらしい。ただ、どうしてもしつこかったため、一番信用で
きそうな研究者に常識の範囲内で検査させたら、結局は婆さんだけ
に作用する力だったみたいで、皆ガツカリしていたと婆さんは笑っ
て話す。

そんな婆さんの隣にいる爺さんは、その時のことを思い出して腹を
立てている。

「ふーん。それだけかわいかったら婆さん昔からモテたんじゃない
の？」

「おっ！ 真司も婆さんの魅力に気づいておったか？ じゃが、儂
の婆さんに手を出すのは許さん」

「はいはい……それで、どうだったの？ 爺さんよりいい人いっぱ
いいたんじゃない？」

「あらあら、わたしにはお爺さんだけでしたよ。わたしは弱い（
・）ですからね？」

真司はテレビや新聞をあんまり見なかつたので気付いていなかった
が、この世界では、一般的に強い女性が好かれる。強い女性という
のは腕力、技術、『神様の落し物』などを合わせた戦闘力の高い女
性と言い換えてもいい。かわいさや美しさというのは女性の価値を
高める効果は薄い。

実際、体がごつくて乱暴でも、強ければ人気がある。それに、ここ
近年増加した『神様の落し物』の戦闘系の力はそういった女性が比
較的拾いやすいというのが統計的に分かってきている。

男は基本的に女性より弱く、『神様の落し物』を拾った人は過去を
見てもほとんどいないため、互いに激しい自己主張を繰り返して強

い女性の気を引くのが大変だと多くの男は語っている。まるで動物の社会である。

爺さんは婆さんと幼馴染だった上に、感性が一般の人と異なっていたようで、強い女性の気を引こうとしないで婆さんとずっと一緒だったとか。

「僕の両親は見る目がなくての……。婆さんと一緒に結婚すると言いに行ったら、あの子はやめて強い女と結婚しろ、と言ってきたんじゃないよ。最終的には、二人とも真剣勝負で決着をつけてやったわ！」

「ふふ……。あのお爺さんはとても恰好よかったですよ。わたしのために命がけで戦ってくれて。もう惚れ直しちゃいました」

「わはははは！ 愛！ 愛の力じゃよ！！」

「へー……。だから見かける度に爺さんの後ろで睨んでるんだ……。真司が言ったその言葉に、爺さんは腕を組んだ高笑いの状態で、婆さんは照れて赤くなっている頬を両手で押さえた笑顔のままの状態で固まってしまった。」

真司が爺さんの背後に視線を向けると、爺さんによく似ているが、髪があり、厳格な雰囲気の人と、キツイ目つきの極道の姐さんのような人がいる。

下に視線を向けると、どちらも足は無い。

あ、目が合った……

とりあえず、真司がその二人に一礼すると、向こうも慌てて礼を返してくる。

「真司……。まさか!？」

「うん、爺さんの両親だと思っよ。幽霊だけど」

「あ、あらあら……。……」

真司の発言後、爺さんは「今度こそ地獄に落としてやるわー!!」

と手当たり次第に殴る蹴るを繰り返し始め、婆さんは「あらあら、まあまあ、どうしましょ……」と喋って慌てふためく。爺さんは空気を破裂させたり、切り裂いたりしているが、人的被害は出ていない。

そんな二人を放置して、真司は曾祖父母に向き直る。

「爺さんが婆さんと結婚したのが気に食わなかったのでしょうか、あなた方が最終的に認めてくれたおかげで俺はこうして生まれました。ありがとうございます」

俺は姿勢を正して、頭を下げ、礼を述べる。言葉が通じるか分からなかったが、どうやら理解できたようで、曾祖父は目を軽く見開き、（おそらく）フンツと鼻を鳴らして消えて逝った。

曾祖母は少し目元を緩ませて俺の頭を一撫でし、同じように消えて逝った。

述べた言葉は本心ではあったが、真司としては幽霊が自分の家に居座るのはあまり心地よくないため、駄目元でやってみただけである。どうやら功を奏したようだ……

真司が安堵の溜め息を吐いて周りを見わたすと、今だに暴れ回る爺さんによって障子や襖、床の畳から天井まであちこち壊され、湯呑も倒れただけでなく粉々になっていた。

…… 婆さんは何故か一生懸命にお経を唱えている。

仮にも義理の両親にその仕打ちはあんまりではないだろうか？ それに、途中思い出すためにつつかえたり、間延びしたしゃべり方なので効果は見込めないだろう。

「婆さん、もう二人は逝ったよ」

「え〜つと、え〜つとあ……え？ あらあら、本当？ やっぱり幽霊さんにはお経よね〜」

両手をポンと合わせて、首と一緒に可愛らしく傾けながら何やら物騒なことを言う婆さんを放置した真司は爺さんを止める。

「（効いてなかったけど……）爺さんも止まって。もう逝ったから」「かはあああ……ん？ 何と！ とうとう儂の一撃は幽霊をも葬

り去ったか!? さすが儂! ぶわっはっはっはっは!」

爺さんは破壊されてゴミとなった木片や紙などの上に立って気を静めていたが、真司の言葉を自分の都合のいいように解釈してご機嫌だ。

真司からすれば滑稽以外の何物でもない。いや、確かにそれだけ凄まじい業を持っているのを否定はできないが……

この爺さんを常日頃から見ている真司には、男が弱いという一般常識が嘘にしか思えないだろう。

爺さんたちは真司が幽霊を見えることを忘れてしまったのか、何が一番幽霊に効いたのか検討し始める。一人、真司は破れた障子の向こうに広がる青空を、天を見上げる。

「あの二人が新しい人生を楽しめますように……」

突然の幽霊騒ぎからしばらくすると、玄関の方から古い扉の開く音がする。それと「ただいま……」と小さい女の子の声が聞こえてきた。

真司はいつの間にか二人の世界に入って互いを褒め合う爺さんたちをそのままに、玄関へと向かう。

そこに居たのは、背の真ん中くらいまで伸ばした黒髪のを赤いリボンで結んでまとめた女の子だ。

赤のランドセルを背負っており、小学校から帰ってきたのだとわかる。靴を揃えるために真司からは背中しか見えない。

「姉さん、お帰り。」

真司が声をかけると姉の零れいが声の聞こえた方を向く。幼いながらに整った顔をしており、婆さんの面影がある。爺さんに似なくて幸いだと真司は思ってしまう。

母さんに似たという少し吊り上がった目で真司を捉えると、零は少し不機嫌そうになる。

「む……。姉さんじゃなくてお姉ちゃんって呼んで!」

かわいらしく膨れながら真司に近づいた零は、いつまでも呼び方を
変えてくれない真司の両頬を手で軽く引っ張りながら言う。

真司としてはいい加減諦めて貰いたいのが本音である。

痛くないとはいえ、引っ張られ続けるのも嫌なので、彼女の手を優
しく握って頬から手を離してもらおう。

「でも、俺にとって姉さんは姉さんだから」

「うっ……。また、お爺ちゃんと稽古してたの？」

真司がその小さな体に合った道着を着ていることに気付いた零は、
心配するような、咎めるような声音と表情で尋ねてくる。

とりあえず呼び方には納得したようだが、零は男の真司が強くなる
うとするのに反対のようだ。

零自身が争うのが苦手な性格なのも理由の一つなのだろう。クラス
で一番強い女の子のグループにちょっかいをかけられても無抵抗で
我慢しているくらいだ。

両手を握り返し、自分より低い身長の実司を見下ろしながら言う。

「稽古なんてやめたらいいのに。真ちゃん可愛い格好とか似合うん
だから……」

「（俺って特徴が無いから映えるだけなんじゃ？）姉さん、普通と
違うかもしれないけど、俺は好きでしてるんだよ？　普通と

違う俺は、嫌いかな？」

一般的な男の一部みたいに、自分を可愛く見せて女の子の気を惹こ
うという考えは真司にはない。そして、普通の子供にしては異常に
大人びていることを自覚しているし、隠す気はない。

周りからどう思われようと自分は自分のままでありたいという意志
を乗せて、真司は零を見上げ、見詰める。

「う、ううん！　私は真ちゃんのこと大好きだよ！」

勢いよく首を左右に振り、一生懸命否定してくれる零は微笑ましい。
うれしかったのか、真司も目元と頬を緩ませる。

「うん。俺も大好きだよ、姉さん」

真司の言葉を受け、顔をまともに見た零は顔を赤くして、パクパク

と口を開けては閉じている。

真司はその様子に首を捻り、「恥ずかしかったのかな？」と自己完結する。第三者からすれば、かなりの齟齬が生じているのは丸分かりだろう。

「姉さん？」

「うう〜……」

「あらあら、どうしたの〜？」

俺の背後から婆さんがやってきた。いつまでも玄関で騒いでいたから気になったのだろう。

「な、何でもないよ!? き、着替えてくるね？」

零は婆さんが来たことに驚き、自室へと駆け込んでいく。廊下を曲がって姿が見えなくなると、何かにぶつかり痛がる声が聞こえたが、滑って転んだのだろう、またバタバタと足音が遠のいていく。

「あらあら、お邪魔だったかしら〜？」

「? 別に邪魔じゃなかったよ。」

微笑ましそうな婆さんの問いを真司が否定すると、ちょっと呆れられてしまった。その上、「鈍感なままじゃだめよ〜」と怒られるが、真司には理解できないようである。

婆さんもまだまだ幼い孫にはまだ理解できないだろうと諦め、夕飯を仕度するために台所へと行ってしまふ。

後には、疑問で頭が一杯の真司だけが取り残された。

「……別に問題ないよな？」

今日は土曜日である。

週休二日制になつていたので、学校はお休みだ。

この世界では、義務教育は小学生から高校生までなので、真司は幼稚園に通つておらず、いつもと同じ日ではない。

零は遅くまで寝ていたが、真司は爺さんに叩き起こされていつもの鍛錬をしていた。この頃の真司は、鍛えすぎて背が伸びなくなつたらどうしようと不安に思っている。

女が強い世の中に喧嘩を売るような家系の血がしつかり受け継がれているのか、普通の5歳児には決してできない程の苦行（山をひたすら駆け廻つたり、ただただ武術の型を繰り返したり、爺さんに組み手でボロボロにされ続けたり）に今日も耐え抜いた真司は、居間（修復済み）の畳の上で倒れていた。

このままお昼ご飯まで寝て過ごすつもりのようなようだ。

そんな時、起きたばかりですと主張している恰好で零が起きてきた。顔は洗つたようだが、目がショボショボしている。

「ふああああ……。お婆ちゃん、お爺ちゃんおはよ……。……」
どうやら先に爺さんたちと会つたようだ。

昼食の匂いに惹かれたのだろう。

「おはよう。あらあら、お寝坊さんね。もう少しでお昼御飯だから、居間で待つててね。」

「おはよう。学校での疲れが溜まっていたのじゃろな。儂も学校は窮屈で仕方なかつたからの……。……」

「わかつたあ……。……」

爺さんが昔を語りだす前にその場から退散した零は居間へと向かう。台所で二人が盛り上がっているの、ご飯が完成するのは予定より遅れるのは決定だ。

働くのを拒否している頭でテレビでも見ようと考える零はおかしなものを見てしまう。

「ん……ん？ し、真ちゃん！？」

居間に入った零の視界に入ったのは、畳の上で力なく倒れている真司だ。大好きな弟が朝から倒れているのだ。さすがに眠気が吹き飛んだ様子である。

駆け寄って安否を確認する。

「し、真ちゃん！ 大丈夫！？」

「……ん？ あ、姉さんか。おはよう……」

「あ、おはよう……じゃないよ！？ どうしたの？」

「ん、疲れただけ……」

「そ、うなの？ よかった……」

その返事に、真司を心配していた零は安堵したが、突如むくれだす。

「む……！！」

「どうしたの？」

「お爺ちゃんやりすぎ！ もっと真ちゃんのこと考えてよねっ！」

どうやら、真司が疲れ果てた原因となる爺さんの指導方針に不満を持ったようだ。今にも爺さんに怒鳴り込んでいきそうである。

「真ちゃんも、もっと加減してって言えがいいのに！」

文句も言わずに従っている真司にも怒りの矛先が向けられた。

真司がうつぶせの状態のまま、首だけを零のほうに向けると、よれよれの可愛い動物のパジャマを着た零がプリプリ怒って、腰に手を当てている姿が視界に映る。ついでに、長い髪の毛もボサボサだ。本人としては精一杯怒っているのだろうが、全然怖くない。むしろ可愛いので、幼い子供でなければ微笑ましくなってしまうだろう。

「真ちゃん！ お姉ちゃんは怒ってるんだよ！ 何で笑うの！？」
真司も例に違わず微笑んでしまったようだが、零からすれば反省するどころか何故か笑われたので、怒りがヒートアップする。

真司は苦笑に変えて体を起こし、胡坐をかいて畳の上に直に座って謝るが、反省の色は全くない。

「ごめん。姉さんが怒ってるのは分かるけど、かわいいから怖くないよ」

パジャマ、着替えたら？

その言葉に零はきよとんとしたが、自分の恰好を確認するなり顔を赤くして、居間から全力で駆け出す。

「真ちゃんのパカー！」という声と慌しい足音がドップラー効果で聞こえそつだ。

昼食を終えると、零は真司を連れて街へと繰り出した。

いつも家や山で過ごしている真司のことを思つての行動である。まあ、少しは姉らしいところを見せたいという打算もあったのだろう。爺さんや婆さんが小さい子供だけで出歩くのに渋つたが、零が「二人だけで大丈夫！」と自信満々に何度も言つて渋々認めた。

爺さんが真司にちゃっかり「何かあつたら、この携帯で助けを呼ぶのじゃ！」とメツチャ真剣に告げていた。

普段からそうであればいいのに……

「だからこそ爺さん、かな……？」

街から離れたといつても、賑やかな中心部から離れているだけなので、住宅地が近く、子供だけでも比較的安全である。

零は特に目的を持たず、街がどんなところかを探検するかのようには歩き回る。人通りがとても多い中心部には行かず、道に迷わない程度に真司の手を引いて歩いていく。

二人ともあの家系の血が流れている上に、自然に近い環境で育っているのも、その探検ごっこをあまり疲れずに楽しんでた。

色々なことに感心した様子を見せる真司に、零もご満悦だ。頭の中では、真司の中の零の株が急上昇だと考えているに違いない。

だが、とある公園で休憩しようと考えたのが間違이었다。いや、

ある意味正解だったのかもしれない。

公園には、ごつい体格の見るからに強そうな女の子を中心としたグループが先に居た。

学校で零にちよっかいをかけているグループだ。

後に真司が知らされた話では、その女の子は空手を習っており、県大会で一位の実力だったらしい。

武術を習っている女性が力を誇示するもこの世界ならではだろう。厄介なことに巻き込まれる前に引き返そうとした零だが、先に取り巻きの一人（男の子）が零と真司に気付いた。

「あれ？ 天裂だ」

「天裂？ へ……」

リーダー格の女の子

仮称ちびゴリラとする

が零と

真司を視界に入れると、にやりと笑って取り巻きに指示を出す。

それを聞いた男女の取り巻きは二人を囲んでちびゴリラの前に連れて行く。うん、どう見ても不良集団にしか見えない。

「よぉ～天裂、奇遇だねえ」

「そうみたいです。私たちは急いでるんで、帰ってもいいですか？」

零は明るい様子と打って変わり、暗くて静かな感情が薄くなった様子でちびゴリラに対応する。

真司からすれば知らない姉に見えるが、ちびゴリラ達にはいつものことなのだろう。フンツと鼻を鳴らして顔をゆがめる。

「相変わらず弱いくせに生意気だねえ……。誰が偉いのか今日こそは教えてやろうか？」

言って、ちびゴリラは取り巻きに合図を送り、零の腕や肩を掴ませ、動きを封じさせた。

その様子を楽しげに見ていたちびゴリラは零に近づき、殴りかかるうとする。が、その眼前に誰かが割り込んだ。

真司だ。

自分の姉を守りたいという考えを実行。零に背を向け、ちびゴリラに相対する。

しかし、真司は零の前から動かない。

ただ、気負いもなく立っているだけだ。

理由は勿論ある。真司は爺さんに鍛えられているとはいえ、実戦経験はない。つまり、自分がどれだけ強いのか分かっていない。姉を助けたいが、下手に攻撃して相手をよけいに怒らせるわけにはいかないと考えた真司が導いた答えは、

「殴るなら代わりに俺を殴ってくれませんか？」

身代わりだ。

その答えが意外だったのだろう。ちびゴリラはきよとんとしたが、真司の言った言葉の意味を理解した途端笑いだす。

「あつはははは！ 天裂！ いい男見つけたじゃないか？ 弱いお前の代わりに殴られる男なんて、どこで見つけたんだい？」

取り巻きに抵抗していた零も真司の行動に驚いて動きを止めていたが、ちびゴリラの問いに意識が戻って、慌てて真司を説得しようとする

「真ちゃん！？ ダメだよ！ 危ないよ！」

大好きな弟が自分のせいで殴られるのは嫌なのだろう。必死に呼びかける。

対する真司は落ち着いている。何故なら、

「（爺さんと比べれば像と蟻みたいなものだしなあ……）どうです？ 見せしめに俺を殴るといっのは？ それで今日は勘弁してほしいんですが？」

真司が再度自分を身代わりとする交渉を持ちかけると、ちびゴリラは何がおかしいのか再び笑い出す。その様子に、零だけでなく取り巻きも目が点になる。

「くくつ、あんたガキの癖に面白いじゃない。どう？ 天裂は放って置いて私と仲良くしようじゃないか？」

「後藤さん！　こんなガキを相手にすることないですよ！」

「黙りな。で、どうする？」

取り巻きの一人が騒ぎ、他の奴らも同意するが、ちびゴリラ（後藤さん？）が黙らせる。こいつら本当に小学生なのだろうか？　どこ
のヤンキー集団だ？

「あー、すみません」

ちびゴリラの意外な提案に、思わず気を抜いた真司は後頭部を片手で？　きながら告げる。

「　　あなたに興味がありません」

誰もが沈黙し、ピユーツとタイミングよく風が吹いて去っていく。
真司の目の前にいるちびゴリラは俯き、肩を震わせている。もちろん、怒りで。

「ふ……ふざけんじゃねえー！！」

そこに技はなく、ただ怒りで我を忘れたように腕力だけで殴ってくる。

利腕っぽい右腕を振り上げ、背の低い俺に振り下ろすようにして殴る。

続いて左腕。

再び右腕。

それを繰り返す。

俺も鍛えているとはいえ、5歳の肉体なのでその攻撃を受けてしまう。真司以外の人からすれば、ちびゴリラの連打は全てまともに入っているように見えただろう。

何度か攻撃されている内に落ち着いてきたのか、技を用いた一番強い拳打を真司の腹に当て、真司は零たちに当たらないよう後方へと吹き跳んだ。

それを追いかけて、ちびゴリラが真司に近寄る。

零の悲鳴が公園に響き、止めるように懇願するも、ちびゴリラは歩みを止めない。

そんな背景を無視している真司の目には雲の少ない青空が広がっており、「いい天気だ」と場違いにも思っているときに見てしまった。赤い球形に見える光の塊だ。小さい光が徐々に近づいて大きくなってくる。ふわふわ、そよそよ、ゆっくり真司の近くへと近づいていく。その光が、真司の足より下、つまりちびゴリラの方へと風に流されて移動する。そして、その光がちびゴリラに触れるかと思われた瞬間

「ダメー!!!」

零だ。

取り巻きを振り解いた零が、ちびゴリラの左後方から勢いよくぶつかり、ちびゴリラから見た右前方、真司の左足元に突き飛ばした。零はちびゴリラが直前まで立っていた所で手をついて倒れている。

赤い光が、零に触れた。

光は弾けて零に降り注ぐ。まるで、祝福するかのよう……

「あ、天裂！ てめえ……！」

「触らないでっ！」

ちびゴリラが突き飛ばされたのに驚いた取り巻きは、一拍遅れてちびゴリラと零に駆け寄る。

そして、その内の一人の男の子が零に掴みかかろうとするが、零はそれを拒絶するために振り払う。

強く、吹き飛んでしまえという意味を乗せて……

「へっ？ あ……げふっ!？」

振り払われた取り巻きの男の子は5mは軽く吹き飛んだのではないだろうか？

吹き飛ばされた本人は何が起こったのか分からず、地面に背中から着地して呻き声を上げている。

その様子に、上半身を起こした真司と起き上ったちびゴリラ、そし

て取り巻き共は何が起こったのか理解でいないで。

いや、真司は理解した。

今は零を包むかのように広がる、あの光
『神様の落し物』

零は自分がしたことと呆然としていたが、自分の両手を見つめ、今まで感じなかった力を感じると、笑い出した。

「……あは、あはは、あははは、あはははは！ あはははははは！！」
歪んだように、嘲るように、蔑むように、嬉しそうに、感謝を述べよう。空高くへ、思いよ届けと……

そして、上へ仰け反ったような体制から元に戻し、ちびゴリラを見据える。

零の突然の変化に、ちびゴリラだけでなく、取り巻きも恐れから肩を震わせ、口から言葉にならない呻きが漏れてしまう。

「う……うわっ、うわぁー！！！」

一人の男の子があまりの恐怖に公園から立ち去り、それをきっかけに次々と逃げ去っていく。

公園に残ったのは、零と真司、引き留める声を無視され、取り残されたちびゴリラのみである。

ちびゴリラは零に見据えられ、逃げられない。

「あはっ……。あなたが、悪いんだよ？ 私だけじゃなく、真ちゃんにまで手を出した、あなたがっ……。！！！」
「だからっ……！！！」

零はゆらゆらと体を揺らしながらちびゴリラに近づく。

一歩……また、一歩……

足取りはしつかりとしているが、前髪に隠れたその目の先には何が映っているのか分からない。

落ちた強者か、哀れなスケープゴートか、罰を受ける罪人か……

弱者となったちびゴリラは、強者になった零から逃げようにも、恐慌状態で足が竦み、腰が抜けているのでじりじりと後ろへ下がることしかできない。いや、もう動くことすらできなくなった。

それでも零は歩みを止めない。

「(……………さなひ許さない赦さないいい気味消える壊れちゃえ死ん

」

……………ひ、だり手？

今にも飛び掛かってしまいそうな零の歩みが、突如止まった。

……………誰かが、私の左手を握っている？

左手に今までなかった、あるはずのない抵抗を零は感じた。

何かの力で強化されている零にとって簡単に振り払えるほどの小さな抵抗だが、それを無視することは何故かできなかった

「姉さん、こっち向いて」

真司が零の左手を握っていた。

零の変化に驚きはしたものの、すぐ落ち着いた真司は零を振り向かせるために呼びかける。

今の零を放って置いてはおけない。

「ああ、駄目だよ……………」

「姉さん……………」

零は真司の姿を見ない。

「私には、やることがあるんだから……………」

「姉さん」

零は真司の声を聞かない。

「だから、待ってて……………」

「姉さん！」

零に真司の言葉は届かない。

「すぐ、終わ」

「零！！」

届け！

真司は力を込めて叫ぶ。

姉を、零を間違わせないために。

今まで感じたことのない気配を滲ませる真司の声に、零がビクツと体を竦める。

ゆっくりと、ぎこちなく、恐れながら、左手を握る相手 真司へと振り返る。

いつの間にか零からは、鬼気も、真司の目に映っていた赤い光も、霧散して消えている。

そして、二人の視線がぶつかった。お互い、相手の目に自分の姿が映っている。

零は真司に恐れを抱いた。

真司は零に激怒し……悲しんだ。

零は視線を外したかったが、外せなかった。眉を上げた真司の睨みつけるかのような鋭い視線が、零の視線を外させない。

零はいつもと違う真司に恐れを抱き、震えて泣き出しそうになる。何か言おうとするも、意味を成さない言葉しか発せない。

「え……あ……しん……ちゃ……?」

「零、今何をしようとした?」

「……う……あ……あ……ああ!??」

「何をしようとした!」

「……ご……めん……ごめん……なさい……」

真司の言葉に、零は己の過ちに、己が罪を犯さんとしたことに気付く。

大好きな弟が止めてくれなかったら、あのまま大嫌いな奴の所へたどり着いたら、零は零のままではいらなかっただろう。

静かな公園に女の子の涙声が広がる。

……もう、自分を見失った鬼はどこにもいない。ただ、怒られて泣く子供がいるだけだ。

零は顔を俯かせ、ただただ謝り、涙を流し続ける。流れ続ける涙を手で擦り、拭おうとするが、目元を赤くするだけで止まらない。

真司は内心で焦っていたため、止まってくれたことに安堵した。飯に、零の暴走が止まらなければ……真司は全力で零の敵になるつもりだったのだ。勿論、零のための行動なのだろうが、それを見た零がどのような反応をするかを考えると……顔を上げ、手を伸ばし、自分より年上の子供の頭を撫でる。

「姉さん、もうあんなことしないよね？」

「……うん。うん！もう、じま、ぜんつ！」

「……うん。俺はいつもの姉さんが好きなんだからね。『力』に、『拾い物』に飲まれないだね？ 約束できる？」

零は泣きながらも一生懸命頷き、それを見て苦笑を浮かべた真司が撫で続けながらお願いする。

もはや、どちらが年上なのか分からない。

特に、真司の外見と雰囲気が一致しない。

「……うん。約束、するっ！」

「うん。なら、俺も約束するよ。約束を守る姉さんのことを信じ続けるし、助けるから」

「……真、ちゃん。それ、普通の、男のセリフ、じゃない、よ？」

「じゃあ止めとこうか？」

頭を撫でられたままの零は女が強い世の中に反する真司の約束を疑問に思い、首を傾げる。

それについては真司もおかしいのだろうとは思っているが、間違っているとは考えない。

零は目から手を離す。もう、涙は止まったようだ。

「……うん。約束しよ？ 私も真ちゃんを助ける！ 指切り、しよ？」

こうして、姉と弟は約束を交わした。二人だけの秘密の約束を……

「帰ろ、姉さん？」

「うん！」

真司は帰ろうとして零に手を差し出すと、零も真司に手を伸ばしてしっかりと握りしめる。

「……あ、後藤さんどうしよう?」

そのまま帰ろうとしたが、近くで気絶している後藤ちひこに気付く。

二人以外に反応する人がいないと思えば、気絶していたわけだ。白目を剥いているのでとても怖い形相になっている。それに、公園に後から来た人がいたとしてもあの状態の零を見れば即Uターン、いや、Vターンしただろう。

「罰として放って置こうよ。」

「……うん、そうしようか。あ、真ちゃん! 怪我は!?!」

「大丈夫。ちゃんと避けて逸らしたから直撃してないし、怪我もしてないよ。」

零が殴られていた真司を心配するが、手を引いて家へと向かいながら真司が話す。

真司が言うには、相手の攻撃を受け流したり、ベクトルを逸らすよ
うなこと(中国武術で言う化勁もどき)くらいできないと爺さん相
手に持たないらしい。そのおかげで今回は助かったのだろうが……
……どれだけ容赦がないのやら……

日が傾き、空が朱く染まっていく中、姉弟は手を固く結んで家路へと歩を進める。

二人の歩いた後には、幼い笑い声と長い影が残り、消えていった。

「(急所を狙えば……、投げて関節を……) いや、まだ無理か……」

「真ちゃん?」

「ん、何でもないよ。早く家に帰らないとね」

「……お爺ちゃん、怒るかな?」

「(……俺が怒られるんだろうな)」

家に帰ってからのことを考えると、思わず溜め息を吐いてしまう二人であった。

春の拾いモノ（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3903z/>

神様が落としまして.....

2011年12月13日09時45分発行